

安間 美津彦 氏

(高校 27回卒)

安間医院院長

小田原高校 学校医



＜経歴＞

1981年 3月 東京医科大学卒業

1981年 6月 順天堂大学病院勤務

1990年 5月 順天堂大学内科学大学院修了

1995年 1月 安間医院勤務

＜これまでの主な活動内容や心に残る職務上のエピソード＞

1995年に自院の跡を継ぎ、内科小児科の普通の町医者になった。医師会の仕事や急患診療所の当番医、市内の園医や学校医、コロナ禍では発熱外来も始めコロナワクチン接種にも参加した。68歳になり体力、知力、記憶力の衰えは否めない。むかし小田高の朝礼で眺めた先生方の、誰よりも高齢だ。しかし医師会の若い先生方や全国の大学同窓生の活躍を見習えば、まだまだ精進が足りぬと反省している。

＜高校時代はどんな学生だった？＞

①ふもとの城山中学から50名余りが進学した。その校舎を横目で見ながら階段を百段上がればよいのだから、遠方から通うクラスメイトに比べれば「祝小田高ご入学」の気分は希薄で、しばらくは中学生の延長線上のじつに中途半端な生徒であった。

②入学時の女子生徒60名はなぜか4で分割され、15人ずつ偶数クラスに配属された。そして1年4組の自分は幸せだった。いまでも「45名全員男子」は考えたくない。

③受験を控えた3年になると、文系理系にクラスが分かれた。進学校として恥じない結果

を狙った斬新な試みとして、3年生全員が一日おきに午前授業で下校となった。もちろんまっすぐ帰宅し机に向かうものは少なく、この取り組みはすぐに終わったようだ。

④落研（落語研究会）は楽しかった。自身の「真打ち昇進披露」の日は、授業をさぼり慰靈塔で古典落語の本を丸暗記した。笑わせてなんぼの小田高祭「かしの葉寄席」の「大喜利」では部員全員でネタを練りに練った。顧問の草山先生が「お前は医者の息子だからな」と、「嫁取家蚊ん朝（かとりやかんちょう）」という名前をつけてくださった。無給医局員時代は、日曜日に子供たちを走らせるテレビ番組の待機ドクターのバイトをした。そのレギュラー陣のコント赤信号の小宮孝泰さんこそ、その落研を作った一学年先輩だった。毎週会えて嬉しかった。



＜在校生・卒業生（後輩）へのメッセージ＞

当時受験勉強は、旺文社の「螢雪時代」を買い始める高3からでよかった。実際自分は高2までJALのパイロットになるつもりだった。それは小学生が目を輝かせて「プロ野球選手！お花屋さん！」と真剣に答えるのと似ていた。つまり高校生の頭で思い描く「進学先」「職業」「理想の人生」などは、「夢」と「現実」の入りまじるカオスな世界なのであった。

一方で今は教育現場や家庭環境を含めたライフスタイル全体がすっかり変貌をとげ、つくづく自分の時代でなくてよかったとほつと/or している。しかし生徒たちはそれが当たり前のように遠方から小田原に集まり、八幡山を登り小田高で一日過ごす。学業、部活動、学校行事に汗を流し夕方になると山を下り、場合によっては学習塾の寄り道もあると聞く。なんだかんだで泣いて笑って三年間、やがて大勢の友達とそれぞれの進路に分かれしていく。実はそういうご縁だったのか、母校の学校医を引き受けたのが旧校舎のころ。毎年の健診で若い生徒の胸に聴診器を当てる。すると50年前の自分が重なり、不安と恥ずかしさ、そして誇らしさと感謝で、今度は自分の胸がいっぱいになる。「大丈夫、自信を持て！新入生も在校生も、焦らず慌てず笑顔で小田高生活を楽しめ！今はまだ夢も目標もぼんやりしていても、君のGPSはきっと素晴らしい進路を示してくれるよ！」あとは「堅忍不拔」の気持ちで一步一歩それに近づいていけばよいのだ。こうして毎年校医は陰ながら全校生徒にエールを送り、もう20年以上が過ぎた。